

和歌山市景観まちづくりシンポジウム（平成23年12月3日（土）14時～）

パネルディスカッション 「和歌山市の素晴らしい景観を未来へ」

パネラー： 二丁目応援団事務局 にし よしふみ 西 祥文 氏
トンガの鼻自然クラブ みやした けいじ 宮下 啓司 氏
和歌山県建築士会 なかにし しげひろ 中西 重裕 氏
市副市長 はたけやま たかてる 畠山 貴晃 氏

コーディネーター：大阪大学名誉教授・和歌山市景観審議会会長 なるみ くにひろ 鳴海 邦碩 氏
(以下、敬称略)

●問題提起 ～景観をどう捉えたら良いか～

鳴海：ただいまご紹介いただきました鳴海と申します。

今から4人のパネリストを迎えまして、和歌山の景観について考えるシンポジウムを行いたいと思います。

それぞれ和歌山の景観まちづくりに関係されていますので、具体的な話が聞けるかと思いますが、まず冒頭に私の方から、景観というものをどう捉えたら良いだろうか、ということ少し問題提起させていただきます。

できるだけ、お話の終わりでも、どこかで関連づけていただければ、ディスカッションが上手くいくのではないかなと思います。それではスライドで少し説明いたします。

●ブラタモリと景観

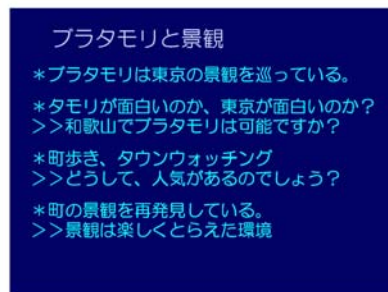
鳴海：皆さんブラタモリという番組をご存じですか？

最近NHKでずいぶん人気があると思いますが、つい先日学会の会合で、ブラタモリの演出を担当されている方とお話する機会がありました。あの番組は東京の景観を巡っているんです。景観というと皆さんは特別なことと思われるかもしれませんが、NHKの番組でタモリが歩いている。あの様子が景観を味わっているということだと、そういう風に考えていただいたらいいんじゃないかと思います。

あの番組では、東京をまわっているんですね。東京のことを日本中の方が面白いと思っている。ちょっと変だなと思うんですけど、タモリが面白いのか、東京が面白いのか。東京ってやっぱり憧れがあるからではないかと思います。

では、和歌山でブラタモリは出来ますかというのが一つの質問なんです。

先ほどお話がありましたが、まち歩きとかタウンウォッチングとかは、若い人はあまり参加しておられないんですが、お年を召した方には結構人気がある。和歌山でやっていて



も人が集まる。

ブラタモリが東京でやっていることは、和歌山でやればもっと面白いまちの魅力の発見につながっていくんじゃないかと思ったわけです。ですから、景観というものは特別なことではない、ということです。タモリが歩いて東京があれだけ話題になるんですから。

和歌山にも古い歴史がありますし、発展の様子もあるわけですので、和歌山ならブラタモリでどのようなことが出来るだろう。そういうのが一つの話題であります。

景観というのは楽しく捉えられたら良いと、まず一つ目に申し上げます。

●なぜ景観を整備するのか

鳴海：昔から、なぜ景観というものを気にしないといけないかというときに、色々なことが言われています。

一つは、「人を迎える為に景観を整備する」ということ。よく取り組まれていることです。

皆さんがお客さんを迎えるときに、お家を整理整頓したり、お掃除したりする。要するに、人が来たときに環境を整える。こういう考え方は江戸の昔からありまして、お殿様が行列をつくるとか、朝鮮から使節がやって来たりすると、みんな環境を整えるんですね。整えるといいましても、飾り立てるのではなくて、「見苦しくなくする」というのが原則としてありました。

国体とか全国大会とかがありますと、環境の整備が行われますけども、これもよく似た考え方に立っていると理解することが出来ます。

二つ目は、いろいろなところで取り組まれていますけど「観光資源になるから、景観を整える」ということがあります。

ずいぶんいろんな所で頑張っているわけですが、素晴らしい自然の眺め、名所があったり、歴史的な環境、街並みがあると、人が集まって訪れてくれますから。それから賑わいのある環境も人をひきつけてくれます。商店街や、お祭り。

人に魅力を感じていただいて、来てもらう。そうすると、それが経済的な潤いにつながっていく。そういう考え方も目標としてあります。

三つ目は、「地域の誇りとして景観を整備したい」という考え方。

なぜ景観を整備するのか

1) 人を迎えるために景観を整備する

江戸時代からあった考え
>>見苦しくないようにする

お客さんが来る時
>>玄関周りや家の掃除をする

地域の大きなイベントの時
>>全国大会、国体

2) 観光資源になるから景観を整備する

素晴らしい自然の眺め
>>名所、名勝

歴史的な環境
>>歴史的な町並み

賑わいのある環境
>>商店街、お祭り

私も随分いろんな所に行きますが、タクシーにのって、タクシーの運転手が自分のまちを自慢するまちはいつも良いなと思います。ところが、あまりそういうところが少ないまちでは、タクシーの運転手さんもぞんざいでまちのことを何も言ってくれない。和歌山の運転手さんはどちらか知りませんが、そういう傾向があります。

3) 地域の誇りとして景観を整備する
 自分の町を自慢できるのはうれしい
 >>タクシーの運転手さんが自慢するまちには魅力のある町が多い
 自慢できるふるさとを持つ
 >>全国的に知られた場所
 >>お城、名所
 それを守り育てるために結束できる
 >>自然の景色、見晴らし、町並み

自慢できるふるさとを持つというのが、とても大事なんです。全国的に知られている場所、名所がある。そして、時々テレビなんかで出る。そういうことは、東京とかに行っている若い人が見ると随分、自分のことのように誇りになる。そういうことがあります。

それを守り育てるために結束もできる、コミュニティーのまとまりも、景観ということから生まれてくる。そういう特徴もあります。

四つ目は、「当たり前のこととして景観を整備する」ということです。自分自身も楽しめるし、人も楽しんでもらえる。

4) 当たり前のこととして景観を整備する
 自分自身も楽しめる、人にも楽しんでもらう、人を思いやる
 >>整理・整頓、ごみのポイ捨てをしない、自転車を放置しない
 花や自然を愛でる
 >>自分の家の庭で
 >>公園などの公共の場で

整理整頓したり、ゴミのポイ捨てをしたりしないとか、自転車を放置しない。当たり前なことなんですけど、ちゃんと出来ると気分が良い。ゆとりがでてくる。

その他に、花とか自然を愛でる。自分の家の庭で愛でたり、公園で愛でたり。そういう環境にあることが一番大切なんじゃないかと、そういう捉え方もあります。

私が今までいろんな所で、景観について地域の人とお話なんかすると、みんな「子どもの環境を大事にしたい」と言います。

例えば小学生の通学路があって、通学路を大人になって思い出せるように整備したい。当たり前前に良くしていったらいいじゃないか、という考え方があります。

● 図と地の関係 ～ルビンの壺～

鳴海：これはルビンの壺です。一種のだまし絵なんです。

これはどちらかの色を反転させますと、壺が見える。また、反転すると人が向かい合っているように見える。浮かび上がって見えるところが図、沈んで見えるところが地。こういうのを図と地の関係といいます。



何が言いたいかといいますと、浮かび上がってくる壺の部分、例えば和歌山をイメージすると浮かび上がってくる和歌山の部分、代表的な和歌山城とかですが、白いところはバックになって浮かんでこない。そういうところが地の環境、例えば暮らしている身近な和歌山は沈んで浮かんでこないかもしれない。

ところが見方を変えると、暮らしている身近な和歌山の方が浮かんでくる。そうすると壺が沈んで見える。

景観というものを考えるとき、浮かんだり沈んだりするという二つの性質があるということです。どっちを大事にするかという問題ではなくて、浮かんでくる場合もあるし、沈んだりもするという二面性があることが大切です。

浮かび上がってくる和歌山を良くしたりすると、よそから来た人にとってとってもインパクトがある。ところが、市民にとっては浮かんで来るものより、沈んでいるものの方が、日々暮らしていますので大事である。その両方をまちづくりの場合では使い分けていかないといけない。それが問いかけの二つ目になります。

●人を迎える村づくりの取り組み ～小さな町でもできること～

鳴海：私がある会議で一緒した愛媛県の内子町。歴史的な街並みで有名なところなんです、そこから山の中に入っていきますと石畳があって、小さな村がある。人口200人ぐらい。そこで、よそからいろんな人を迎えて村づくりをやっている、頑張っている。

そこで、人口が同じぐらいで、素晴らしい環境を持っているところにまず勉強にいかうと、スイスのある村で、人口が267人ぐらいのところに村の人が何人か行きました。

ここに行って学んだことは、「スイスのこの村の人は、なにも特別なことをやっていない。普通に暮らして、きれいにやっている」ということ。それを理解したんです。何も特別なことはやっていない。自然と暮らしがとてもいい調和をもたらしていると知りました。

じゃあ、自分たちはどうしたらいいのか。

要するに、「自分たちの村の20年前はもっときれいだったな」とみんな思い出しました。色彩がきれいだった。それが段々無くなっていく。どうしてだろうかと村の人は考えて、私たちが普通に農業で村を作れるんだと、大事に仕事をやっていけば村はきれいなんだと気がついた。そういうことを目指す。我々都会から行くと、あつというようないきれいな村の姿が帰ってきた。

和歌山市のような大きなまちではこのようにはいかないかもしれませんが、小さなま



ちがやっていることから学び取れることがあるんじゃないかと。一つの手がかりとして、こういう例を紹介いたします。

私は青森県の弘前出身でして、弘前と言いますと、浮かび上がってくる代表的なものは、弘前城と桜並木です。僕らはもう見慣れていますが。弘前から見た津軽富士といわれる岩木山、これも僕らにとってはシンボリックな景観。でもこれだけじゃないですよ。

まちの姿がたくさんあって、シンボリックなものもたくさんありますけども、日常的な暮らしの環境というの、なかなか味わいを持っていていいんじゃないかと。

どういうまちの人でもそこで育つと、なにか頭の中にあるイメージがあって、それを伝えたり、自分のふるさとを思い出す手がかりにしたりしている。



景観というと、なんとなくよそよそしい感じがしますが、石畳の農家の景色も景観、山も景観だし、見える環境が景観だと理解して、その見える環境が人にインパクトを与えている。そういうことを理解していただければ、景観を考えていくいろんな切り口が見えてくるのではないかと思います。

冒頭に私の方で、景観のとらえ方とか、景観の効用について少しお話しさせていただきました。

●和歌山市の景観と自身の活動の紹介

鳴海：それでは、こちらに並んで居られる4名の方から、和歌山市の景観について、ご自身が行っておられる活動等をふまえてお話していただきたいと思います。

西：よろしく申し上げます。自己紹介としましては、先ほど紹介していただいた部分以外には、日頃は広告の企画制作をしまして、看板であったり、ホームページや印刷物を作る仕事をさせていただいております。

まちに賑わいがあるほうが、いろんな職業に関しても仕事が増えるだろうということで、賑わいをつくるために先ほど紹介いただいたこと等をさせていただいたり、今回は城下町バルということさせていただいたりしております。

そんな中で仕事柄、景観ということに関しましては、私の仕事とは遠いんですが、やはり看板等を提案させてもらうという意味では、例えば、「まち中に提灯ぶら下げませんか」等、サインというか案内という意味も含めて、まちの情緒が出来ればというものを見方を

させていただいております。

身近に和歌山城がありますので、歩いている途中で雰囲気を感じる椅子があればとか、和歌山城にもっと人が溢ればいいのにとということで、そういう意味では、「景観プラス優しさ」だと考えております。

例えば、駅から降りたところで、城まで歩いたら何分かかかるのか、そういう親切な部分と情緒を感じるような看板であったり、雰囲気を感じるイスがあればいいとか、そういう目線で見させていただいております。

宮下：今日はトンガの鼻自然クラブということで参加させていただきました。元々トンガの鼻自然クラブは、その前に「自然を守る会」として女性達が景観を守ろうという活動をしていました。その活動を広げて、トンガの鼻の史跡の里山作りを、かなり高齢化しておりますが、皆さんと一所懸命やっています。江戸時代の史跡を見てもらえるように、里山作りで作業しております。

私が、半世紀以上の変遷を見てきた中で、後で少しスライド等を見ていただいて、こういう風にならなくなっていったというお話させていただければと思います。以上です。

中西：中西です。私は建築の設計をやっておりますけど、和歌山の景観の魅力は、やはりあのパースペクティブ。上から鳥になったかのように見た地形が、とても印象的だと思います。まさに箱庭のようなまちだなと思っております。

こういう個性的なまちを見ますと、戦後の様々な経済成長の中でいろいろな建物が建っておりますけども、徳川以前の浅野の時代に、久保町のあたりに教会が建っていたと聞いています。浅野幸長が病気になったときに、和歌山にいた伝道師に治してもらった。それで関係が良くなって教会を建てることを許した。その神父がそのときの様子を本国に手紙に書いている。その手紙が、大英博物館に残っているんですが、そのときの和歌山の風景「実にすばらしい。2万人の人が住んで、家並みもきれい」だとはっきりと書いてある。家並み、よけいな物が何もない。先ほど先生の話しにもありましたけども、自然との調和、そういうまちであります。

素地が和歌山にありますので、多少変化はしておりますけども、特に戦災の時に6割以上消失したという状況を踏まえても、まだまだ素敵な場所もある。特に和歌浦には、景観の様々な魅力的な部分があります。



私は県外の人に来られた時に、まず案内するのが妹背山なんです。三断橋を渡って、妹背山に行ってそこで干潟を見ていただく。みなさん感動されます。

干潟は日々時間が刻々と変化します。同じ風景が全くな



い。まさにレースの模様を見るようにすごい風景が広がります。私たちが見ることの出来る風景を、万葉の時代も見ていたということになる。

ここで大事なのは、江戸時代から和歌山城の城下町を計画する上で大事にされていたことは、見通しというか、何がその先に見えるのかということだと思っております。

雲蓋山、妹背山に渡る三断橋の袂から山脈の方の方を見ているのですが、対岸の風景みたいなことを、私たちはこれから大事にしないとイケない。幸い今は非常にきれいな対岸の風景が見えると思うのですね。

これは山の稜線、向こうに見えている稜線をいかに守れるか、私たちは今問われているのではないかと思います。

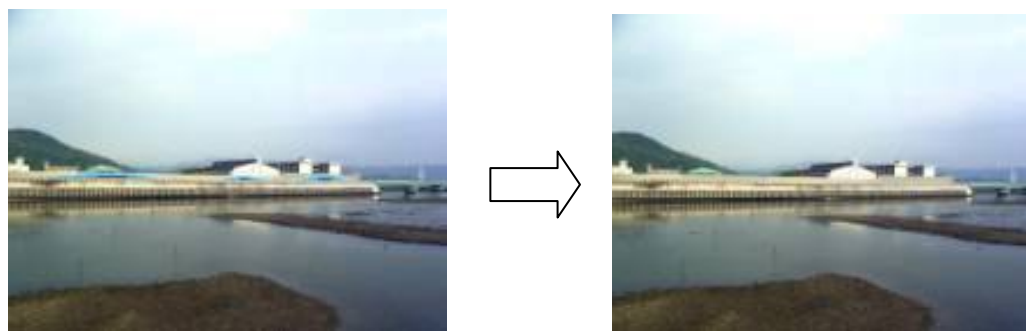
仮に、高層のマンションが建ったとしたら、こういう風に稜線が消えていく。イメージで仮に建物が建ちますと、極端な例ですがこれほど風景が変わっていくという風に思います。



もう一つ見ていただけますか。明和中学校手前の、ここで注目していただきたいのは防音壁なんですね。防音壁に今、ブルーと濃いブルーで彩色を施している。リゾート博の時に、海岸通りとして道が整備されました。そのとき市の方で防音壁を学校がありますので作る。こういう中で彩色を施されたことについては、その思いというのは、そのリゾート的な雰囲気をつくらうと、彩色したと言う考えに関しては前向きな理解をしたい。

ただ先ほどから見ていただいておりますが、遠景の景色を考えたとき、こういう場合は主張しない方が良くはないかと。ブルーに塗るのではなく何もしない。もっと良い方法は壁面緑化して緑があればいいかと。

後ほどまた市の他の建物についてご案内したいと思います。



畠山：和歌山市の副市長をしております畠山と申します。よろしくお願いいたします。

まず始めに、市長の方から先ほど申し上げましたけども、今月12日に景観条例、景観計画を施行、実施することとなっております。この間様々な形で皆様に多大なご協力いただきました。今後ともその実施に向けて色々ご協力いただく場面が多いかと思いますが、よろしくお願いいたします

若干私事ではありますが、私は近畿というか神戸出身でありまして、18歳まで関西で、その後、18年間東京で過ごしました。2年前の4月からから現職に就きました。関西に住んでいた時代、東京にいた時代を含めましても、それまで和歌山になじみがなく、実際に来たこともほとんど無かったと言う状況でした。

それで、和歌山に来ることになりまして、和歌山のことを調べたりしておりますと、和歌山に長く居られる方には当たり前のことだと思うんですけども、きわめて景観に恵まれているところであると。万葉集の頃から数々の歌枕とされてきた。

江戸時代の儒学者に貝原益軒という人がおりますけども、この人が高野山の方から和歌山のまちにやってきました、それを見て曰く「日本三景にも負けずとも劣らない」と言うようなことをいわれたと聞いております。

また、近代になりましても、明治から昭和30～40年頃でも、日本での名所のベスト10をあげる、あるいは、名所双六、名所絵はがきであるとか日本の中から名所をピックアップするという場面では、必ず和歌浦の景色が選ばれてきたというようなことがあったと聞きまして、きわめて恵まれていたと認識しました。

自分としましても、和歌山の色々なところを見させて頂きまして、和歌浦や雑賀崎、紀三井寺、友ヶ島など魅力的な所がそれぞれありますけども、価値をみることができた。

先ほど鳴海先生からお話ありましたけども、やはり、歴史というものが景観というものにひと味加わっているということです。特に先ほどブラタモリという話がありまして改めまして、関東に20年近く住んだわけですけども、近畿地方に戻って考えると、東京にも歴史の重みというものもあるんですけども、それに比べましても近畿の中の歴史の重み、古さと言うのを垣間見る機会がありまして、近畿の中のどこに住ましても、「1,000年以上前になんとか天皇がやってきた」とか、歴史がびっしりと積み重なっているところがあるということでもあります。

和歌山も当然、万葉の昔からその歴史を積み重なってきたまちでありますので、魅力はどこに出しても恥ずかしくないものだろうと。

私も、市役所の一員としまして、和歌山の積み重ねて来た歴史、それと景観を後世に伝えるために色々頑張っていきたいなと思います。

●和歌山市のこれから景観を考えるヒント

鳴海：ありがとうございました。4人の方から、一巡してそれぞれの自己紹介と考えを延べいただきました。

そうしましたら、宮下さん中西さんがスライドを準備しておられるので、解説していただければと思います。和歌山の景観を考えるヒントといえますか、それを見た上で、西さんにはまちなかの景観。景観に限らないんですけども活性化をどのように進めていったらいいかと言う話をその後でいただいて、畠山さんには、市のまちづくり的観点から述べて頂くこととします。

宮下：トンガの鼻の活動に関しましては、資料を入れさせていただいておりますので読んで頂ければと思います。

先ほど話した、半世紀の移り変わりを紹介したいと思います。ここ雑賀崎漁港ですけど、船の停めているところは、高度成長期に埋め立てたところなんです。私の子どもの頃は、すぐ家の前が砂浜だった記憶があります。



トンガの鼻には、石垣が残っていて、黒船を見張って国土を守るために徳川時代につくった施設があった。建物の柱の跡があって、調査で分かりました。



ここが金属団地。埋め立てで出来たものです。1997年ですが、こういう埋め立て地のこの先にも埋め立ての計画があったんですが、地域住民が十分理解できていないこと、また県の予算が緊迫していたということで、中止になりました。

このグリーンベルトみたいなものが、元々の海岸線のラインです。この先が、木工団地。皆さんもご存じの通り、これも埋め立てられました。私が確か15歳の頃だったかと思います。子どもの頃、よく泳いだところです。市長のお父様が知事をやっておられる頃で、ちょうど50年くらい前の景色ですが、段々と景観として損なわれてきました。



こういう風に、いろんな半世紀の間に、高度成長期に乗かって、いろんな景観が損なわれていたんですけども、経済性から考えるとやむを得ずこうなったのかなと思います。

しかし、もしかしたら半世紀にこれだけ変えなかったら、他にも負けないようなリゾート地になっていたと思うんですけど。

やはりそこら辺で判断をまちがえると、景観が段々なくなっていく半世紀を目の当たりにしたので、安全安心の町になりましたので残念とはいいませんけど、今残っていたらなと思います。

以上です。



鳴海：トンガの鼻自然クラブは何人ぐらいで、どんな方が関わっていますか。

宮下：地元が中心になって作業をしているんですけども、色々なところからも来ていただいて、いつも来るのが20名ぐらい。里山の作業しているのが、20人前後です。

それ以外にもリタイヤした人がまだやってくれている。

自然を守るということを地元発信で、それに興味を持った人が手伝いに来てくれるか形がいいのかなと思っています。

鳴海：他の地域にもこういう団体があるが、そういうネットワークとかはあれば教えていただけますか。

宮下：最近、過疎化・高齢化によって、支え合うという活動をしますと、相談されたりとかするようになりました。空き家が出て来たとか、高齢化していくと作業が出来ないとか、畑も作れないということがおきていく中で、何とか和歌山でネットワークを作って、和歌山で活動しようじゃないかと。今は、生まれかけている途中です。

中西：建築士会では、建築士が耐震診断、耐震補強、災害調査等の活動を行っております。

私の方から、先ほどの続きで、建物についての案内をさせていただきます。

近くから紹介しますと、まず「朝間邸」旧中原邸です。和歌浦口バス停の近くにあります。和歌浦地区の景観の一つだと思います。



大正13年から昭和3年まで、6年くらいかけて作られました。特に注目していただきたいのが、道に面した塀に緑色っぽく見えておりますが、これが緑泥片岩、普段私たちが青石と言っていますが、これをパネル状にして貼り付けている。さらに奥に洋館がある。洋館の下はタイル張りですが、上の黒く見えているのは、なんと那智黒石。那智黒石一つ

一つをはめ込んでいる。全国でここにしかない、非常に個性的な建物だと思います。

それに付随して、和風の建物と奥に蔵があります。蔵の腰の部分には、青石の一枚板を縦に張っている。これだけ大きな青石の一枚板取るのは、大変ですね。当時かなりの財力があつた中原家だから出来たものです。

地域の材料はとても重要ですので、いくつか青石を続けますが、これが打越町にある、青石の洋館です。当時山口さん、今も山口家なんですけども、土木建築業をされておりました、石の採掘業もしていた。雑賀崎で取った石を、これは乱張りのような形で張っています。当時は3階建ての洋館の事務所でしたが、現在は2階建てとなつて、今は住宅として使われています。昭和初期の建物です。



次は、青石積みの蔵です。中央構造線にそつて青石文化圏があると思つているのですが、青石を丁寧に切つて積んでいます。壁厚が30センチから40センチぐらいあります。これを作つたのが打越の石工さん。石工さんの住まいだつたわけです。仕事の合間に、当時15人ぐらいの職人さんを抱えていたようなんですが、その合間に作つた蔵です。



今は下原さんが大切につかわれています。温度変化が少ないので、中で野菜が全然傷まないと言うすごい蔵です。

次は、今福にある郭邸。明治の10年のものです。和歌山県内で最も古い洋風建築です。その手前にも同じように、大正期につくられた青石の壁があります。



次は、絵に描いたような洋館です。堀止にあります。昭和元年にできました。アメリカ屋と言う会社の設計施工で造られた洋館です。この建物で驚かされるのは、1階と2階の間に設備の階が作られていて、メンテナンスが非常にし易いということです。



さらに木造建築ですが、土壁の中に敷き瓦、四角い瓦を三層にして入れています。木造が火に弱いということで瓦を入れています。戦災中に近くで爆弾が落ちたりしていますけども、今なお健在です。

次は、和歌山城の近くです。加田家という邸宅があります。昭和6年に完成しました。やはり青石を使っている。奥に茶室がある。邸宅は建物だけではなく、残された庭もあります。庭は、もちろん家の人を楽しむためのものですが、和歌山市にとつても貴重な緑の資源だと思います。



煉瓦アパートと私たちが呼んでいるものです。大正9年紀陽織布という繊維会社の社宅としてつくられたものです。

二戸一の建物でして、1階と2階を一戸で使う。隣に同じように二戸一でつかう。その間が水廻りになっています。もともと5棟あったんですけども、シロアリで上部がやられてしまって、4棟は上を取って1棟のみ残っています。

さらに幅2mほどの狭い通りの先端に和歌山城が見えています。これも感動する風景ですね。先ほどのビスタの原理でいうと、こういうものに人々は感動すると思います。

次に、これも煉瓦張りの建物ですけども、大正末期にできた和歌山無尽という建物です。銀行建築が今ほとんど残されていない中で、戦前の銀行の建築としては唯一残っているというものです。現在の紀陽銀行が所有されています。

次は、橋をみたいと思います。市堀川に係る寄合橋です。昭和16年にできています。このアーチを見ていただくと、とてもきれい。今様々な当時の建築物がありますが、この時代にこんなきれいなアーチを作っているということです。

次は、中橋です。戦前のものは、戦災で焼け落ちて、戦後の28年に中橋がくるわけですけども、元々は京都の桂川にかかっていた東海道線の鉄道橋だったんです。明治の時代ですけども、東海道線というのは車輛の量が多いので早く交換します。交換された後、まず、徳島県で同じく鉄道橋として使われました。そして、戦後の昭和28年和歌山市のここにきました。今は道路橋としてつかわれています。

中橋のポイントとしては、大変きれいにまっすぐにお城が見えているということです。

そして、これは、じゃんじゃん横丁です。昭和30年頃。経営者の廣永さんが大阪のじゃんじゃん横丁に憧れて、雰囲気の良い店を集めはしごが出来るといふ飲み屋があればいいということで、一角がつけられました。路地があつて楽しい雰囲気があります。

様々見てきましたが、和歌山市にはまだまだ個性的な場所があります。それを大切にしていけば、必ず皆さんが思うようなすてきなまちになると思っています。



少しですけども紹介させていただきました。

鳴海：ありがとうございます。建築士会では、こういうものを見て歩くツアーというものは、やるのですか。

中西：はい、建築士会には各地域に支部があり、支部で様々な委員会があります。近代建築の見学会や、江戸時代の紀伊国名所図会に描かれたポイントを比較しながら和歌山城周辺を歩くツアーなど時々やっております。

西：3名の方と若干見ていくところが違うのかなというところはあるんですが、ソフト面からのこととお話させていただきます。

私も、もちろん和歌山の中心地のまちなかは、好きなんです。お城がちらっと見えるところ、川とかが通っているところ、もちろん好きなんです。もっと好きなのが、おいしくて安い店がたくさんある、賑わいのあるところ。そういうのを含めて、景観かなという気がしています。

和歌山の景観も素晴らしいですけども、もっとどうやったらよくなるかを考えますと、例えば、京都の祇園とかに行きますと、飲食店さんのエアコンの室外機がでています。そんなものが、茶色に塗っていたり黒に塗っていたりする。お店の中に入っても、エアコンを黒く塗っていたりする。そんな小さな事が積み重なって、祇園らしいところになる。

道端にも灰皿がたくさんあるんですけど、灰皿一つ一つが茶色に塗っている。そういうことがあれば、和歌山市内も統一感ができ落ち着いて、更に良くなるのかなという気がしています。

また、両国のほうに行きますと、道端にお相撲さんの像がたっている。ああいうのが自然で、ここは両国なんだからという雰囲気がにじみでている。

和歌山らしさっていうのは、どうなんだろう。和歌山城がある。では、和歌山城らしさとは何なんだろう。

和歌山城に、動物園がありますよね。せつかくある動物園。もう少し綺麗になると、近くの幼稚園だけじゃなくて、もうちょっと遠いところからも来てくれるのではないかなと思います。動物園もまた景観の一つだと。

あとはいつも思うんですが、片男波。きれいな砂浜なんですけど、夜にデートしたいと思うんだけど、駐車場が早く閉まってしまう。せつかくの景観なんですけど、使いにくい。景観が景観として使いづらい状態。そういうソフトも含めて景観なんじゃないのかなという気がしています。

とにかくソフトというところで言いますと、先ほどのプラタモリのように歩くことは可能で、歩いたら面白いところは沢山あると思うんです。

けど、先ほどの色の統一とか、途中で休むところとか饅頭屋さんとか、もう少しあれば

いいかなって思います。お城の上の方でもお店はあるんですが、もうちょっと情緒のあるような店にすれば、全体的に景観がもう少し成立するのかなと思います。

そういうような優しさ、ソフトと景観がセットになっていけばいいかなと、僕の普段から感じることです。

鳴海：バル実行委員会と竹燈夜と、この辺はどういう人が活動しているのですか。

西：わかやま城下町バルと、竹燈夜っていうのは別のイベントなんです。竹燈夜っていうのは、和歌山市の観光課がされている、和歌山城に竹燈籠を並べて、そこにロウソクをともして和歌山城を輝かせるというものです。

バルもその日に合わせれば、我々のイベントも相乗効果があるんだろうということで、一緒にさせていただいたんです。

わかやま城下町バルっていうのは、我々元々飲み歩き食べ歩きが好きな仲間が、わいわい普段からなにか面白いことができないかといっていたのが、キッカケなんです。

そもそも、僕も二丁目応援団カードといいまして、裏城下界限のお店屋さんが一つになって共通でなにかできへんかということで、スタンプカードをつくりました。そういうのも今年動き出しましたので、せっかくなので一層のこと飲食店さんが集まったイベントができないかなということ。

ちょうど、バルというものがあちこちで事例が出来てきたので、それを参考にさせてもらいました。我々の仲間が集まって、時間的にはタイトだったんですけど、150店の飲食店さんが集まっていただいて、格安で特別メニューを食べさせていただくということになりました。メンバー的にはいわゆる普通の人の集まりです。

畠山：皆様のこれまでのお話と重なることもあるかと思いますけども、やはり景観条例、景観計画というものが、ルールをつくって、例えば色をこうなさいとか、押しつけるということで意識されていることがあります。そこがメインということではなくて、まちをつくっていくための基本的なツールということで、理解して頂ければと思います。

市民の皆様に参加していただいて、和歌山らしいまちをつくっていくということが必要なのかなと思っています。

先日、大阪で電車に乗っておりますと、男性、女性の若い3人ぐらいのグループがいます。その男の人が標準語だったので和歌山の人ではないと思うんですけど、突然和歌山の話をし始めまして、「和歌山市というのはものすごい景色が良いところなんだ」と。

その人が言うには、和歌山駅からけやき大通りのけやきの街並み、そういうところに価値を置いていると。そういうことでございました。けやき大通りの景色というのは、人によってご意見あるろうかとも思いますけども、他の人が何に関心を持つかということは、実はちょっと良くわからない。

色々なことに関心を持たれる方が多くて、例えば、マンホールの形、建物の外の換気扇の形、工場、夜景など。いろんな切り口で見れば、和歌山にはもっと着目できるところがあるのかな、というふうに考えております。

例えば前橋市なんかは、「前橋近代建築物」といって、近代建築物を改めて市としても発掘していこうとしている。また、「一坪の風景」という、昔からあるような食堂とか、路地とかそういうのを市民の皆さんから送っていただいて、市としても認定していこうとしている。

私としましても、他の市のそういうことも引き続き勉強させていただきまして、市民の皆様の方から和歌山らしさということで、何か気づいたことがありましたら、それを市としても一生懸命アピールして、市外からも人が来ていただけるような仕組みをこれからつくっていければと思います。

ありがとうございました

●まとめ

鳴海：今日は、これまで4人の方々をお迎えして、これからの和歌山の景観について意見を交換してきました。

ここの近くにある万葉館に、このシンポジウムの前に行きましたけども、そこで和歌山の展示があって、1,000年以上前にここの海岸線の環境の美しさというのを発見して詩に詠んだという方々が居て、その歌が100何個今に伝えられてあると。

その環境に現代的な意義を見いだして、宮下さんのように地域の方々と自然を守ろうと進めておられる方もいる。

まちの文化、まちの歴史も面白いものがあるし、石の建物なんかなかなか味わいがあったいいんじゃないかと思うんです。

そういうものの価値を認めて、それをのばしていこう。またそれを守ろう、とかいうのは人がやることです。そういうことを発見するという、目が利くということと、それと併せて仲間と一緒にそれをどうしていこうかと、取り組んでいることがとても大事なことだと思います。

先ほど副市長のおっしゃられたとおり、東京のプラタモリじゃありませんけども、和歌山には和歌山の資源が沢山あって、それをみんなで楽しんでいくことが、これからの景観作りの基礎になるのではないかと考えております。

今日は十分な時間はありませんでしたが、こういった話し合いを契機にしながら、これからの和歌山の魅力ある景観づくりに、色々な方が参加して取り組んでいくことを願っています、シンポジウムを終わりたいと思います。ありがとうございました。